

(2) 実践に生かしたこと

- ①積極的意欲的な活動内容の選択がおこなえるよう活動内容を設定する。
- ②生徒の自主性を引き出せるような環境設定を心がける。
- ③身心の状況を正確に把握し、無理のない活動を設定していく。
- ④活動に集中させるときと、会話を楽しむなど自己を表現するときの関わり方に配慮する。

事例研究

事例検討を通して、生徒の病気を理解し、それに伴う心理面への課題を的確にとらえ日々の実践に反映させていくことを大切にしている。

指導上、困難さを抱える生徒を事例にあげる



実態把握表を作成し、指導目標



課題の共有化を図り、実践する



生徒の変容を確認し合い、課題の再設定と教訓化

タイプ別 I ～ VI に分類

I 「ターミナルのとりくみ」

II 「血液腫瘍・血管奇形」

～病気と思春期課題を越えて成長する姿～

III 「潰瘍性大腸炎」

～喪失体験と心理葛藤～

IV 「病気と発達障害」

～発達障害、知的な問題への対応～

V 「全身エリテマトーデス」

～病気の理解と自己管理～

VI 「精神疾患」

I 「ターミナルのとりくみ」から学んだこと

～生徒や家族に寄り添い、メモリアルの時間を共有する～

◎生徒とのかかわり・・・達成感と喜びの共感

- ・実態の早期把握
- ・実態に応じた柔軟な対応と創意工夫
(特別な内容や方法はなく手さぐり)

◎家族とのかかわり・・・適切な距離と支援

- ・病室での日常に配慮
- ・保護者の意向を尊重 I 「ターミナルのとりくみ」
- ・コミュニケーションの難しさと大切さ
- ・生きていた証の提供(完成の喜びと作品)

◎教師の連携・・・情報の共有と協力

◎家族の悲嘆に寄り添う心

- ・家族の絆と優しさを表現した詩の取り組み

Ⅱ 「血液腫瘍・血管奇形」から学んだこと

～病気と思春期課題を越えて成長する姿～

- ◎治療の大変さを語る本人を受け止める、また、言語表現ではない形で出してくる繊細な表現を受け止めていく感性を鍛える。
- ◎思いを文章化することで今までを整理し、今後の方向性を確認する。
(例：作文、連絡帳のやりとりや日記など)
- ◎思いを発表し、認められる場や機会の設定
- ◎同世代と過ごす時間の大切さ
- ◎本人の趣味や内面世界の充実と、将来的な方向性の提示
(例：水泳・音楽・小物作り・ドッグセラピーや、卒業生のお話をきく会、文化祭での未来の自分への取り組みなど)

Ⅲ 「潰瘍性大腸炎」から学んだこと

～喪失体験と心理葛藤～

◎本人を大切に受け止め、寄り添う。

- ・それぞれの立場からの声かけ

◎病棟、医師(精神科)との連携。

- ・生徒理解(教師間の連携)
- ・母親への支援
- ・転出するときの配慮(地元校との連携)

◎本人が好きなスポーツ等のできる場の設定。

上記の取り組みにより、笑顔をみせる回数が増えていった。

IV 「病気と発達障害」から学んだ ～発達障害や知的な問題への対応～

◎発達障害の理解

- ・対人関係(社会性)の障害
- ・コミュニケーションの質的な障害
- ・想像力の欠如

◎予想される困難と支援方法の工夫が必要

- ・授業における取り組みの工夫
(視覚情報による提示、板書やノート記入の工夫、言語力の弱さへの工夫)

◎進路(就労の視点)から予想される困難について

- ・保護者への対応(子供の障害理解の困難さ)や、適切な進路を選択することの難しさ

V 「全身エリテマトーデス」から学んだこと ～病気の理解と自己管理～

◎病気による活動制限や自己管理の難しさ

- ・食事の量の制限が難しい。
- ・本人が病気の大変さをどれくらい理解しているかがわからない。病院の指導、本人の発達段階を見極めて。

◎教員間の指導方針の共通理解

◎転出後の申し送り

- ・SLEの病気における活動制限（日光禁、運動制限など）や配慮事項を、コーディネーターを介して地元校に伝えることを確認。

VI 「精神疾患」3ケースから学んだこと

～多様な症状を踏まえた指導時の配慮や支援～

- ◎病気や症状「摂食障害」「発達障害の二次障害」「ネグレクト」の理解
- ◎精神科医との連携の重要性
 - ・学校での毎日の記録、情報を共有する機会を設ける。
- ◎教員間の生徒理解と指導方針の徹底
 - ・心理的安定の基盤づくりのための、担当者による個別対応の重要性。
 - ・柔軟な日課の変更と対応
- ◎保護者との関わり
 - ・定期的な面談の実施による保護者理解と家庭における過ごし方へのアドバイス
- ◎環境調整の必要性
 - ・適切な枠の設定
- ◎精神疾患特有の低い自己像やゆがんだ認知の理解
 - ・自信を回復し、自己を肯定的に捉えるための成功体験の場面を、細かく段階的に設定していく。

ターミナルの取り組みから

中2 Aさん(女子)

- 在籍** 平成25年10月24日～26年6月6日
- 疾患** 急性膵炎・急性リンパ性白血病(再発)
- 治療** ミニ移植へ向けて
痛みの緩和治療(ターミナル期)

8歳(小3) 発病

11歳(小5) 再発(骨髄移植)

12歳(小6) 10月退院 →地元校へ

12歳(中1) 私立中学校入学

13歳(中1) 10月 本校へ入学

病気理解と健康の保持

○病気理解

- 十分な理解(強い意志・自己決定)
- 状況、段階を自覚・分析

○健康の保持

- 体調、目標(計画)に応じた生活
- 痛み止め カセットを自己操作
- 退院-転出-地元校復帰への強い思い・目標
(心身のモチベーションの向上・保持)

心理的安定

○家族の絆(愛情・信頼・安心)

- ・毎日遅く迄付き添う母/父への連絡/弟への思い)
- ・「夜が怖い」～携帯で何時でも対応し寄り添う

○強い希望と目標(退院・地元校復帰)

- ・必ず希望が叶うことを信じ、戦う自覚と覚悟

○待っていてくれる人々の存在とメッセージ

○一人になると不安と恐怖におそわれ不眠

課題

- 発信を見逃さず、丁寧に聴き取り
感じ取り、受け止める
 - 時間と場の共有
 - 興味・関心・意欲を高める学習(活動)
 - 目標や夢に向けての語りを受け止める
- ↓
- ・充実感・自己効力感 → ・心理的な安定
- 心理的安定
不安軽減

取り組み

○主体的な活動を中心にする

- ・体調(心理面)に応じた学習内容(自己選択)
- ・創作的活動

ペーパークラフト作り

ネーム表示作り



○大切な会話

- 本人の好みの話題・ネガティブ感情 ➡ 全面受容
- 目標、夢、頑張り⇒共感・励まし

○教員(病院)間の連絡・共通理解・連携

○担当チームをつくる(個人で対応しない)

変化

◎目標を持ち取り組む / 時間と場の共有



◎達成感・充実感を味わうことができる

「頑張った」「楽しかった」

◎コミュニケーションが図られ

安心感(不安軽減)により笑顔が多く見られるようになる

◎次への期待や希望に繋げられる

「またやりたい」「大丈夫！」

体調不安定
体力低下



希望や夢

不安・恐怖・絶望と希望のはざままで揺れながら

◎自分と周囲との関係性に気づく発言が多くみられるようになる

- ・前籍校の仲間の中で培い、更に成長している、と。
- ・医療スタッフへのねぎらいの言葉
- ・教員への感謝と好意の言葉
- ・家族への愛情あふれる言葉

○病気理解・データ整理、状況把握・判断・分析

○先行きに対する自覚と覚悟

○振り返り、最後まで自分を高め、成長する姿

○自分で納得・整理・訪問看護・家族との最後の写真

家族(母親)へのサポート

◎家族支援⇒心を離さず、共に歩む

○毎日病室へ訪問(特任チーム)

- ・生徒・保護者の状況(体調・心理面)把握
- ・発信を丁寧に受け止め、支援

○本人と母親/母親とのコミュニケーション

- ・時間と場の共有 ※タイミング・間※
- ・喜びを分かち合い、不安を聴き取る
- ・意向希望を尊重、相談、確認⇒安心を
- ・特任チームで

(不安・緊張感が強いため)

◎グリーフケア（そっと寄り添い続ける） （⇒共感・共有・分ち合う・そっという）

○心の内を吐露(誰にでも話せるわけではない)

- ・葬儀後の虚脱・虚無感
- ・泣き暮らす毎日、そして毎日墓前へ
- ・今の自分は？(心・体調)
- ・どうなってしまおうのか？(不安)
- ・心配してくれる周囲の存在
- ・残された家族の在り方
- ・これから
- ・また、話がしたい・・・子どもを知っていてくれる人と・・・

*担当した教員自身も、お母さんと語り合う中で、グリーフケアをしていることに気づく・・・

学んだこと

◎生徒との関わり・・・達成感と喜びの共感

不安を受け止める(共有)

- ・実態の早期把握
- ・実態に応じた柔軟な対応と創意工夫
(特別な内容や方法はなく手さぐり⇒意向・希望・目標を引き出し、支援)
- ・「自分らしく生きる」「成長し続ける」

◎家族との関わり・・・適切な距離・支援し続ける

- ・病室での日常に配慮
- ・保護者の意向を尊重
- ・コミュニケーションの難しさと大切さ☆タイミング・間
- ・生きていた証の提供(丁寧に制作した作品群)
- ・グリーフケア(関係性に基づき、それに応じた)

◎教師の連携・情報共有・理解協力・支え・分ち合い

残してくれた言葉

自分で決めたとき

- 自分の性格は、後悔するのがいやな性格です。
- 化学治療を受けて退院して、家で好きな事をする、という選択肢もありました。
- けれど、好きな事をして、決して楽しむことはできません。
- **可能性がゼロでないならば、ミニ移植を受けます。そう決めました。**
- おかあさんとおとうさんには、私の意見に反対しないでね、そうして、どんなことがあっても後悔しないでほしいと伝えました
- **不安です。ものすごく不安です。**
- **おかあさん、おとうさんといっしょにわたしを支えてくださいね**

生きる希望を語る

移植のときからお世話になった看護師さんが結婚をするので、
テディベアの結婚式のペーパークラフトを作って贈りたい。
少し時間がかかってもコツコツ・・・秘密で作りたいので準備を手伝ってください。
驚かせたいんです。びっくりするかなあ。
それから、3年日記をつけ始めたんです。毎日つけられないけれど、
書ける時はいっぱい書いてるんです。
漢検も受けます。
料理が得意だから登校したら、調理、いっしょにやりましょう。」

残してくれたことば

○**苦しい体験と希望**：「自分ははっきりものを言うタイプ。自己主張もしたし、病気のことは、はっきり伝えなければと思い、話していたところ、『また、病気のせい?!』と言われ孤立状態に。確かに自分は、入院生活していたこともあり、社会性に欠けたところがあったんです。毎日のように家族会議もしました。どうすれば良いのかと。学校でも取り組みがある中、『これでは、ダメだ。自分を変えていかなければ』と決めたんです。大変だったけど……。でも、そうやって意識的に自分を、そして回りの人達のことも考えて言動するようになると、皆とも分かり合え、学校生活がとても楽しくなったんです。(行事写真を見せながら説明)あー、だから早く(治って退院して)学校に戻りたい。早く学校に行きたいよー。そして将来は小児科のお医者さんになりたいんです。」

「戻った最初の試験は、ビツケかな? まあ、しょうがないか。(笑) 少しずつ取り戻していけばいいんですよね。」(体調がよく、非常に精力的に問題集に取り組み、「今日はここまで」と満足した表情で)

○絶望と覚悟

「先生。もう(地元)学校に連絡しなくて、いいです。どうせ勉強したって... もう、勉強したくない！」(ミニ移植ができない状況であることが告知された後に)

○絶望の日の2日後/セラピードッグでの一時

「用意して待っていたら、呼ばれたからびっくりしちゃった。私のために特別に部屋を用意してくれてあって、待っていてくれて。そこに行ってきたんです。ほら、(写真を見せながら)ゴールデンリトルリバーだったかな。大きいのも小さいのも、みんな、お利口さんで全然吠えなかったです。お尻を向けた格好で私の膝に乗せて座らせてくれて。ちょっとかったけど、フワフワして温かくて可愛かった。少し重たかったけどね。楽しかった。でも、少し、疲れちゃった。

「(明日体育祭だけど、輸血をしたら外泊します。)」

○家族への思い

「家族には感謝しているんです。それぞれ私のために、皆一生懸命にやってくれて。弟には、私が入院しているので、いろいろ寂しい思いをさせているから...」

○感謝

「母によく言われるんです。皆さんが、わたしのために、より良いようにと考えてくださっていろいろ関わってくれているって。岩特小学部も地元の中学校もこの中学部でも。本当にそう思います。有りがたいなって。」

○希望と恐怖は常に表裏一体

『調子が良い時には登校してもいいって』言ってもらったから、**い登校していいか聞いてみよう。**

その時は、調理実習にして**“もんじゃ焼き”**作りたいな。一緒に作りましょうね。(笑顔)」

⇒(移植前で「万全な体調を」と心配している母親が『でも...』と言うと)「だって、**無菌室に入ったら、今回はいつもと違うんだから、もう出られなくなっちゃう**

かもしれない！死んじゃうかもしれないんだよ！怖いんだよ！怖いんだよ！！(涙)」

(⇒直後、話題を変えて落ち着いて話始めた)

お母さんの私たちへの言葉

先生方が寄り添ってくださっているとき、
子どもは、**快活に生きる希望を語り**
思いやりを育て、最後まで成長することが
できました。

最後の家族写真を見せてくださる

……家族とともに笑顔の写真

家族に贈った最後の言葉を聞かせてくださる

……「ありがとう」

今後の課題

- 整理した全体自立活動の実践を継続発展させる。
- 個別自立活動の評価と取り出し個別のカウンセリング的手法、セラピー的手法を、だれもができるように専門性と資質の向上をめざす。
- ベッドサイドの生徒の自立活動のねらいと内容を明確にする。

さまざまな病気を抱える子たちとの出会いから学び続け、
よりよい実践を目指していきたい……